

(豊 口)

それでは続きまして、これからのまちづくりを進めていく上で、こういうことだけはやっておかなければいけない、本当に安心とか安全ということを軸においた政策を展開するためには、こういうことを是非国にお願いしたいのだということなどについて、具体的なお意見をいただいきたいと思いますが、最初に飯山市の石田市長、何かございませんでしょうか。

(石 田)

今のところは申し上げたように、治水のためにということで、狭窄部分の河床を掘ってもらうとか、いろいろなことを言ってきていますけれども、やはり最初から私がちょっと触れさせていただいているように、千曲川が我々を育ててきているのだと、これをしっかりと頭においていきたいなと思います。

私たちの子どもの頃、学校から帰ってくると、まず行くところがないわけです。今の時代とは違いますので千曲川に入って泳ぐ、はじめは、泳げませんが、先輩がそれをしっかりと見守りながら、泳ぎを教えてくれた。人間の心をしっかりと育ててきたのを、私は、自分たちの飯山を流れる千曲川だと位置づけしているわけでございます。

私たちの飯山市も四季がしっかりしていますので、できるだけ観光事業に大きな力も入れております。千曲川がなければ、四季をしっかりと彩る体制はできない。

新潟も美しい四季があるわけですが、私たち飯山市の方も千曲川の周りに咲く菜の花、高野辰之先生を含めながら歌った「おぼろ月夜」から始まって「ふるさと」、みんなあの光景が歌われてきているわけでございます。五木ひろしさんの歌った千曲川はちょっと違いますけれども・・・、

そういう中で国交省も私たちも、自然が生んでくれた、暴れて嫌な川だけれども、この川を何とかいい形として、地域の資源として観光に使っていこうということで、先日もカヌーに乗って川下りをしているわけでございますし、また、併せて自転車に乗って川べりをサイクリングする、いろいろな催しをしながら利用していくことこそ、天が作った川を利用して地域の活性化、治水は当然ですけれども、そういう生かし方をしていくことも、これから必要になってくるのではないかと考えているわけでございます。

併せまして、新潟の皆さんも大変ご苦労をいただいているわけでございますが、私たちもそういう利用をしつつ、また、新潟と細かい連絡をとっていかないと、情報が新潟は新潟、長野は長野でやっているという問題がいろいろとありますので、国交省を通じた情報網もしっかり確立されてきているわけでございますので、お話をさせていただきながら、ともどもに安心・安全の地域づくりに頑張っていきたいと思っておりますが、よろしく願います。

(豊 口)

ありがとうございました。それでは、燕の小林市長、お願いいたします。

(小 林)

確かに安全・安心の地域づくりというものが非常に大事なことだろうと思います。先ほども触れましたが、この大河津分水の管理に、国の皆さん方から真剣に取り組んでいただいております。大河津分水より下流の方々は、第2の「横田切れ」(明治29年の大洪水「横田切れ」)はあり得ないという感じを持っていらっしゃる方が非常に多いのではない

かと、もう一回、大河津分水や大河津資料館に足を運んでいただいて、洪水の資料を直接目で見て感じていただきたいと、この機会にお願いしておきたいところであります。

昭和 58 年の水害から、今もう一つの可動堰の工事が順調に進んでいるところで、おかげさまで平成 23 年の通水、25 年の竣工が予定どおりになってまいりました。今いろいろとお話がありましたとおり、もうこれで安心かということではないわけで、国が目指す 150 年に 1 回の洪水にも耐えうる新しい治水対策が求められていますので、何としても特定構造物（可動堰）の改築事業の後に、大河津分水の抜本的な大改修が喫緊の課題ではないだろうかと考えております。是非、この問題につきましても、引き続いて私たちもお願いしてまいりたいと思いますし、真剣なお取り組みをお願いしたいと考えています。

ただ、今、各市長さんの方からお話がありました、最近の異常気象によります洪水の状況が大変なものになっているところでありまして、どちらかと言うと、大変申し訳ない言い方ではありますが、災害が起きた後の対策ということが今議論されているところでありまして、これからは何としても河川事業の予防的な対策投資にシフトしていただければありがたいと、そんな意味でも予算獲得等につきましても、我々も真剣にお願いしてまいりたいと考えています。

特にまた、大河津分水路の問題点でございます。いよいよ 11,000 立方メートル毎秒の流下能力、150 年に一回の洪水と、これはどうしてもクリアしなければならない。今、飯山市長さんのお話もありましたが、きちんとした整備指針がまだ確定いたしておりませんが、この洪水によって予想される山地部の工事用の残土の対応、1,100 万立方メートルとも 1,500 万立方メートルとも言われているわけでありまして、これを生かした地域の開発といいますか、これは国、県、そして大河津分水にまたがる周辺の市、村、こういふことでこの仕事を進めさせていただく上でも、何としてもこれらをどう地元としてこれを契機に取り組んでいくかという一つの連絡、勉強会みたいなものを是非、立ち上げていきたいと考えています。

それからもう一つは、もう二度と大河津分水においては、「横田切れ」をさせてはならないということでございます。今ほどいろいろお話がありましたとおり、最近の異常気象でありますから、私の持論であります大河津分水路の右岸堤防、越水しても堤防が決壊しない、こういう高規格堤防の構想も含めながら、次元の高い、歴史に残る治水事業を、地域の安全・安心の意味で、力強く進めていただければありがたいと考えています。

先ほど、会場から意見いただいた方は、旧与板町の方でいらっしゃると思います。ただ、ハード対策の問題だけではございません。私も何回か新潟市からウォーターシャトルをチャーターいたしまして、大河津分水洗堰の閘門を経て長岡まで行くわけでありまして、残念ながら与板の与板橋で底をすって上がれないと、馬越島で帰ってくるというのが 2 回ございました。

おっしゃるとおり大変な景観でございます。先般も馬越島の航空写真が載っております。これからはハード事業ではなくて地域の環境にマッチした、そして、大河津分水は千数百羽の白鳥の夜の休みの場所になってきておりまして、四季の景観が出ているところでもあります。

これから舟運の復活とか川の駅の問題も、地域の安全・安心と地域の活性化ということと併せて、こよなく信濃川を愛する今日お集まりの皆さん方からも力強いご支援をいた

いて、取り組みを進めてまいりたいと考えています。

最後に、せっかくこうやって治水の歴史「旧洗堰」を文化遺産として残していただきました。大河津分水の治水施設は「洗堰」と、「可動堰」があって、一つのセットなのです。どうしても「可動堰」も有形文化財として歴史にきちっと残していただきたい、このことも安全・安心と地域の活性化と連携しながら、こよなく信濃川を愛する皆さん方のお力添えを是非お願いいたします。

(豊 口)

ありがとうございました。実は私ごとになりますが、大学に1年生が入ってまいりますと、私の授業で一番最初に学生に見せるのが、「郷土の宝(ごうどのたから)」という国交省がお作りになったビデオです。この中に明治29年の「横田切れ」が紹介されているわけですが、そういう信濃川と人々の闘いの中から、どうしても分水を造らなければいけない、これは江戸時代からの大きな願望でありました。私財を投げ打って分水を造りたいと努力をした人たちの歴史もそこに出てまいります。やがて政府が動き始めて、現在の分水の工事に入るわけですが、その工事のプロセスが20分ほどのビデオの中に、実に明解に分かりやすく紹介されているのです。

その時の先輩たちのご努力というのは、想像を絶する大変な苦勞をされておりまして、パナマ運河で使った機械・道具を持ってきて、そこで実際に使って掘削工事をする。あの辺は実は信濃川が運んできた土でできた土地で、ほとんどが砂地のような状態の山です。それが何度か土砂崩れを起こして、掘った川を埋めてしまう。それが簡単な量ではなくて、大変な量の土砂が崩れてくる。そういう土を固めながら分水ができ上がっていくわけがあります。そういう状況を見ると、現在の分水の堤防も、そう簡単な造り方で水を塞ぐという状況ではないわけで、相当の技術的な配慮があの中になされているのだと思うのです。

造って100年くらいたちますと、だんだん問題が露呈してくる。そういう点で、データをベースにして洗堰が改築された。今度は可動堰の工事に入っている。あの洗堰の工事の時に、いろいろと私も参加させていただいて拝見したのですけれども、昔の洗堰の跡が残っています。そのまま文化財として残そうという所長のご配慮がありまして、残されています。しかも、洗堰の基礎は松の木の杭で、松の木の杭を何本も打ち込んで、その上に洗堰ができていたという、日本の治水土木技術の粋があそこに残されているわけです。それを是非、将来の日本の子どもたちにも見てもらって勉強してもらい、日本の国というのは土木工事、治水工事というものがなければ、国の存在はなかったのだということを子どもたちにも理解させる必要がある。そして誇りに思ってもらい必要もあるだろうと、残していただきました。

新しくできた洗堰、自然と川、そして治水ということを含めて子どもの教育というものを考えた時に、いま環境問題が一番最初に出てくるわけです。この信濃川を昔たくさん魚が遡上していた。現在でもサケが帰ってきている。そういう魚が上流へ遡っていく姿を子どもたちに見せることが教育に一番効果があるのではないかとということで、魚道の話が出てまいりました。素晴らしい魚道ができています。私は片側だけかと思ったら、両側に魚道ができています。エレベーターで地下へ下りていくのですが、その窓から見ると、いろいろな魚が遡上していく姿が見えます。たまたま子どもたちが来ている時に、私もそ

ばにいたことがあるのですが、目を輝かせて騒いでいる。子どもたちにとってみれば、魚も自分たちの仲間だと思うのです。その姿を見た時の子どもの喜びというのは大変なものなのです。そういう実態が、私たちのふるさとにあるということです。あれほど子どもの将来といいますか、環境保全といいますか、そういうことに関して配慮した堰というのは、世界でもそんなないだろうと思うのです。そういうものが現在の分水、洗堰にできている。

ですから、可動堰にもまた新しい一つの提案ができあがるだろうと思うのです。小林市長、期待をしていただいてもいいと思うのですが、学習、水、生活、そして土木工事と環境保全というテーマで研究する人たちは、必ず分水を見学しなければいけない。私も学会に来た仲間を分水に必ず連れて行くことにしています。彼らが最初想像していたのと、実際に現場へ行って見たのとあまりに格差がありまして、彼らは非常に感動して帰って行きます。こういうものが新潟県にあるということを私たちは誇りに思うべきではないかという気がしているのです。将来は子どもたちですから、人間教育をどうするかということが、この治水を通して大きな機能を持っているのではないかという気がしています。

見附の久住市長、何か国に対してもっとこういうことをしてほしいというようなご要望がありましたら、是非、お願いしたいと思うのですけれども。

(久住)

今日、質問にもございましたように、川というのは豊かさの象徴だし、環境の象徴でもあるし、ご存知のようにふるさとを同じ川にする自治体があるわけです。それが連携しようという。多分川というものは、豊かさを一緒に持っている。既に私もかかわっておりますが、飛騨川、木曽川、伊勢川の連携というのが始まりまして、第6回目を、先月の9月初めにやり、私も呼ばれて行って、その川で1,077名参加のボート大会をやっている。この20日は、いよいよ利根川で始まります。江戸川区の人たちが水上まで来て、さっき言ったサイクリングを含めて上流まで行こうと、源流から河口までの連携も始まっています。信濃川においても、部分的ですが、長岡市と見附市と三条市の子どもたちが毎年ボート下りをしています。今年は60人でしょうと思ったら、2倍の応募があったと、こういうことが始まっております。川を含めて上流から下流の連携を、例えば今までは川には入るなということできて、これは危険だとかありますけれども、そういう安全・安心という形のもの、指導者がついていけば川を子どもたちに教育の場にしてみっと広げていく。私は今、川遊び百選というのを日本で作ろうという運動をしておりますし、川の駅を作ろうというので今動いていますが、こういう場面を川やダムの中でも提供してもらいたい、そして、その指導者を全国に広げていく、こういう流れの中で信濃川もそういう場面をいっぱい作っていただく。川の水の匂い、香り、そういうものを含めて生物とか環境、これがあると、災害の時にも連携ができるという気運なるのだらうと思います。そんなことを川をベースにして、もう一度、日本の豊かさというものを取り戻す、それは教育の面でも非常にいいものだらうと。国も今、社会資本整備、これからの整備の計画を出してしまし、その中にも今回の環境だとか教育という形も取り入れてもらっているようです。だから、方針としてはそういう流れがあるというのはありがたいと思っていますが、私ども、近くのあの川でそういう現場を見たいと思っております。

(豊口)

ありがとうございました。私も中州へ渡ろうという提案をしているのです。小学生を中州へ渡らせると、親も一緒に来る。数年前、呼びかけましたら、四百数十人集まったことがあるのです。川から町を見よう、ふるさつを見ようと。そうしますと、まったく違った視点での新しいまちづくりの発想が生まれてくるのではないかという期待がありました。ここでまた会場の方からご質問等をいただきたいと思います。長野へ振らせていただきたいと思います。市川塾長さん、お願いします。どなたかご質問がありましたら。

(市川)

ございませんか。

(長野会場)

ただいま豊口先生からサケが遡上するという話がありまして、実は長野県でも千曲川沿岸の小学生たちがサケの稚魚を放流しているのですけれども、5、6年前にやめてしまいました。ということは、大滝ダムを遡上するサケは全然なくなってしまいました。子どもの夢がここで終わってしまったと。なぜサケが上ってこないかということを考えてみますと、どうも新潟県のところで上ってくるサケを全部捕獲しているのではないかというような結論になるのですけれども、漁協のいろいろな関係もあるでしょうけれども、例えば長野県に30パーセントくらいはサケを遡上させようと、そんなような運動はできませんか。

(豊口)

私も実は長岡へまいりました折には、サケが遡上しているとは思わなかったのです。ところが、長岡市のど真ん中、長生橋の下を約1万尾毎年遡上しているのです。魚野川との合流近いところでサケを捕獲して卵を採って、それを稚魚に育てて、記憶ははっきりしませんが、260万匹くらい放流しているのだそうです。ただし、このサケは川を下って海へ行って、海で育って大きくなって、信濃川に帰ってくる前に海でほとんど捕られてしまう。ですから、長岡市が捕っているのではなくて、海の中でいろいろな国の漁船が捕っている。ですから、上がってくるサケは極めて少ないということで、これを国際的にどう調整するかというのはこれからの問題になると思うのですが、子どもに夢を与えることは必要だと思うのです。放流した稚魚が4年後に戻ってくるわけです。1年生で放流した稚魚が4年生の時に自分のふるさとへ帰ってくるということが、もし具体化できれば、これは素晴らしいことだと思っています。これから世界的な規模で協力しないと、今のようなご意見はなかなかうまくまとまらないのではないかという気がしますが、努力をする必要性は私はあると考えております。よろしゅうございますか。

(市川)

サケが長野県になぜ上ってこないかということ、原因はサケの生態をよく知らないということなのです。具体的に言いますと、長野県のサケが最初に放流したのは4月中旬なのです。最後に3月18日、サケというのは12度以上の水温になると体が弱ります。18度で死ぬわけです。

そこで、長野県の場合は、例えば3月中旬に放流しますと、新潟の河口まで1か月かかりますから4月中旬になってしまいます。そうすると、新潟を流れている対馬海流は真冬でも12度ありますから、そこで長野県で孵化放流したサケが、暖かいものですから外洋に出ていけないのです。

そこで、18度になるとみんな死んでしまうということで、長野県でサケを放流したに

もかかわらず成功しなかったというのは、放流日をまったく無視してやっていたということにあるわけです。

そういう点で、新潟の場合は法則をちゃんと守っているわけです。

そういう点で、新潟の場合はサケが帰ってくる。長野県の場合は、せっかくサケを放流しても犬死にではなくて、サケ死にしているというのが現状だと思います。

そういうようなことの反省に立って、もう一度サケの放流事業をやってみることが大事だと思います。

というのは、今から 1000 年前、信濃の国、越後の国、越中の国が日本の三大サケ産出国なのです。そういう特徴を見ましても、もう一度実験的にサケの放流を科学的にやってみるということが必要ではないかと思います。

(豊 口)

大変貴重なご意見としてお伺いしておきたいと思います。では、新潟の会場で、どなたかお願いします。

(新潟会場)

メモで用意してまいりましたので、読み上げます。

信濃川自由大学 4 回の講座すべて受講した者でございます。皆勤賞をいただけるのかなと期待していますが、それは冗談です。

質問事項としまして今日持ってまいりましたのですが、可動堰の回覧板の創刊号があります。新しく可動堰を造ろうということで、10 年がかりで世紀の大工事ということでございますが、新しい可動堰は、今の可動堰よりも下流、固定堰の下流に造るということになっている。それによって流れが変わるということが、これに書いてございます。それから、右岸側の堤防に直接洪水が当たらなくなると書いてございます。今の可動堰は、この写真を見ても分かりますけれども、保存されることになるだろうと。先週の土曜日に大河津資料館で講座がございました。その終了後に五百川前館長は希望されておりました。今も燕市長も申されましたけれども、あそこを世界遺産に残していきたいというご希望、これはおそらくかなえられるだろうと思います。

しかしながら、流れが変わってどうなるかということなのですが、この写真でも分かりますが、JR 越後線の鉄橋付近に右岸側の堤防、ここにもろに流れがぶつかることになると思います。あそこが決壊すれば、我が家はたちまち水没します。小林清燕市長のご邸宅も近くにあります。これも同様でございます。洗堰の改修工事とは異なりまして、私どもは先祖代々あそこに住んでいるのですが、自分と家族の生命、身体、財産が脅かされる問題であります。他の地域に住んでおられる方々が可動堰を残してほしいと、単なるセンチメンタリズムでおっしゃっているとは決して申しませんが、今、私が心配しておりますのは、私の父、それから祖父の話で聞いたのですが、大河津分水路ができる前、たびたび水害に遭っているわけです。そのような被害を私は味わいたくないと考えておりますので、その点について、これは切実な問題です。そこに住む住民として切実な問題でございますので、明確に、そんなことは心配するなというようなご返事をいただければ非常にありがたいです。

(豊 口)

これは私がお答えするよりは、今日、国交省の方がお見えになっていますので、直接所

長さんからお答えいただきます。

(天 野)

国土交通省信濃川河川事務所長の天野でございます。国に対するご質問なので、先生方に答えていただくよりは、私が答えた方がいいのかなと思って出てまいりました。

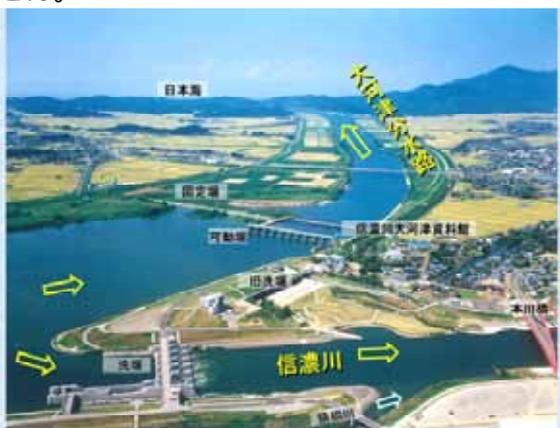
先ほどお話があったように、可動堰の改築の目的はいくつかございますが、そのうちの一つは、今は洪水が真っ直ぐ右岸側の堤防に当たるようになっている。それはなぜかと言うと、可動堰自体が右岸側に非常に寄っていて、あそこには河川敷がありません。左岸側はあるのですけれども。

だいたい堤防を守るために前面に河川敷がある方が、洪水時には堤防は非常に強くなります。ところが、今の可動堰周辺の右岸は、全然河川敷がないという形になっています。

可動堰を中央にもって行って前面に河川敷を造るというのは、今回の可動堰の改築の大きな目的の一つになっています。

それで、旧可動堰をどうするのだというご質問かなと思っておりますが、洗堰と違いまして旧可動堰はまさに川の真ん中に建っていますので、これを残すとすると、洪水時には支障になる恐れがあるという話もありますので、残す、残さないについては、市長さんからもご要望をいろいろいただいておりますので、今のところ国として旧可動堰を残しますと申し上げたことは一度もありません。

今後どうするかと言われると、なかなか答えづらいのですけれども、今、写真にちょうど出ていますように、今の可動堰は右岸に非常に寄っていますので、右岸のあの辺の前面にほとんど河川敷はございません。河川敷があるところとないところでは、断然河川敷がある方が堤防の強度が増しますので、新しく造る可動堰は真ん中に持って行って、右岸にも左岸にも両方河川敷があるように造りたいと思っています。それによって堤防が破堤する確率は、全体として非常に下がると思っています。お答えになっているでしょうか。



(豊 口)

よろしいでしょうか。私も委員の一人で、今度の改修工事の研究の場へ呼んでいただきました。実際に模型を造ってその川に水を流す。11,000立法メートル毎秒くらいの水が流れてきた時を計算して、水がどう流れるかと色水を入れていくのです。それがどういうところへぶつかるかといった水の流れが明解に分かるのです。そういう実験を何度か重ねていました。堤防の安全性というものを確保しているということですが、先ほどのご心配は、恐らく全くないだろうと私は思います。ありがとうございました。

時間が押してまいりました。今日、長野の会場にもたくさんの方がお見えになっています。市川塾長、長野の方々、どうもありがとうございました。大変素晴らしい会ができましたので、改めて厚く御礼を申し上げたいと思います。それから、今日この会場にお集まりの方、本当にありがとうございました。

今日は2時間しかございませんでしたが、実際に空から見て、そして信濃川の生い立ち

を確認して、信濃川には狭窄部だとか、国が管理する部分だとか、県が管理する部分だとか、扇状地帯であるとか。それから洪水の時に水が溢れる、昔の地形であればそこに水が溢れて、遊水池として機能したところがあったのですけれども、今そこに人々が既に生活の拠点を構えている。そういった問題点をはらみながら信濃川、千曲川の一貫した流れが新潟平野を作っているわけです。数回前ですか、新潟の地形について地学的に分析していただきましたら、実は両側の山は2000万年くらい前からできた大きな岩盤の山であって、新潟平野というのは信濃川の土が溜まってできた平野なのだとということがわかりました。しかも、6,000メートルも流土が溜まっているのだと聞かされ、驚いたことがあります。我々の住んでいる平地の下は、6,000メートルにわたって土なのです。非常に不安定な状態のところにな新潟平野があるわけです。これを世界一の治水技術によって、安定した地帯としてこれからも育てていくということを国の方々の口からも聞けました。お仕事の信念として心の中にはっきりと組み立てられていることが、私はこの3年間のプロジェクトを通してよく分かりました。安心・安全という言葉、これは単なる言葉ではない。実際にそういう土、土地、環境が作られていくのだということを、今日皆さん方と一緒に確認したいと思っております。信濃川は日本一の川であるし、日本一非常に不思議な、生き物のような、実際に生きている川だと思います。そして、人々と一緒に歴史を作ってきた川でもあります。川としても非常に文化性の高い川だと私は思います。そういう宝をこれから長野県の人たち、そして新潟県の私たちと一緒に誇りとして、一緒に国づくりの軸としてゆくことを確認したいと思っております。

三市長さん、今日は本当にどうもありがとうございました。いろいろなその土地のお話を聞かせていただきまして、我々も大変参考になりました。改めて厚く御礼を申し上げます。ありがとうございます。

(司 会)

どうもありがとうございました。豊口さんのおっしゃったように、データでは分からない生の声、また、未来への提案など、貴重なお話をいただきました。また、長野、新潟両会場の皆様にも積極的にご参加いただきまして、大変ありがとうございました。それでは、壇上の講師の皆様を拍手でお送りいただきたいと思います。ありがとうございました。

それでは、平成19年度信濃川自由大学第4回講座「水系一貫～これからの千曲川・信濃川の治水～」を閉会させていただきます。新潟、長野両会場の皆様、最後までお付き合いいただきまして、大変ありがとうございました。本日は、誠にありがとうございました。